

感じたことから

○「子ども読書週間」(4/23～5/12)

私は自家用車で通勤している上、出無精であるため、なかなか公共交通機関を利用することはありません。そうした中、先日、所要があり久しぶりに電車に乗りました。そのとき、改めて同じ車両の人たちを見まわしてみると、当たり前のことですが、座っている人、立っている人に関わらず、ほとんどの人がスマホを出して画面を操作していました。何だか、文庫本を取り出して読むのが化石化された人間になってしまったようで、恥ずかしい気持ちになりました。でも、本を読むのも楽しいんですけど…。

さて、子ども達の読書活動を推進するために毎年4月23日を「こども読書の日」と定め、その日から5月中旬(今年は12日)までを「こども読書週間」として、子ども達の読書活動を推進しています。そこで、子ども達が本を読むよさを少し考えてみました。

例えば、子ども達が『目の前には、のどかで心打つ景色がずっと遠くまで広がっていました。』という文を読んだとします。その文から子ども達は、過去の自分の経験をもとに想像するので、それぞれが違った映像(景色)を頭に思い描くことでしょう。そして、そこにこそ文を読む面白さがあるように感じます。

「目の前には、のどかで心打つ景色がずっと遠くまで広がっていました。」



各自が抱く異なるイメージ

文章ではなく、映像であったら、「視覚」をもとにより正確に伝えたいことを全員にわかりやすく伝えることができるでしょう。それに比べ、文章は各自の捉え方によって、それぞれが異なるものを想像するため、共通した何かをとらえさせるには難い面があります。しかし、文章をもとに、「頭」で考え、「心」を働かせ、一人一人が感性豊かに想像していく過程にはよさがいっぱい詰まっているように思います。

映像には映像なりのよさが、文章には文章なりのよさがあります。子ども達には、場の状況に応じて、「視覚」による映像で情報を正しく取り入れるか、「頭」と「心」を働かせ文章で感性豊かに情報を取り入れるかを判断し、活用してほしいと思います。

また、文章を読んで、それぞれが捉えた違うイメージを語り合う(出し合う)ことで、文章のもつ奥深さを感じることができるでしょう。それが、国語科の学習の醍醐味の一つだといえるかもしれません。



今週の火曜日には、各教室で教師による「読み聞かせ」を行いました。また、この「読書週間」には、子ども達が進んで読書をしている姿が見られています。明後日から、10日間のゴールデンウィークに入りますが、子ども達には、じっくり読書をすることも、楽しみの一つに加えてもらえればと思います。

